

## 7. フクジュソウ

日ごとに強くなる陽射しと、うららかな陽気に誘われて雪の下から真っ先に顔を出し黄金色の花を咲かせるのはフクジュソウ（福寿草 *Adonis ramosa*）です。古くから、旧正月の鉢物として親しまれており、元日草、賀正草、報春花など新春にちなんだ別名を持っています。また、春真っ先に咲くことから「マンサク」とも呼ばれています。江戸時代のはじめから観賞用に栽培され、品種改良などが盛んに行われたことから 100 種類を超える園芸品種があったといわれており、日本の伝統的な園芸植物の一つとされてきました。しかし、そのほとんどが途絶えてしまい現存するものは数えるほどしかありません。さらに、園芸用に山採りされたり森林の伐採などによって、個体数が年々減少し、またフクジュソウの生育に適した環境も失われていることから、絶滅が心配されています。

キンポウゲ科フクジュソウ属（*Adonis*）は北半球の暖帯～温帯に広く分布しています。このうち日本に生育するのはフクジュソウ（*A. ramosa*）1 種のみとされてきましたが、近年の研究によりキタミフクジュソウ（*A. amurensis*）、ミチノクフクジュソウ（*A. multiflora*）を合わせた 3 種があることが明らかになっています。フクジュソウは多年草で、北海道、本州、四国に分布する日本固有種です。根茎は短くて太く、3～4 月に咲く花は黄金色で、一つの茎に多数の花をつけ、葉の裏に毛がないのが特徴です。キタミフクジュソウは北海道、樺太、朝鮮～シベリア東部に分布し、葉の裏には毛があり、一つの茎に一花しかつきません。ミチノクフクジュソウは北海道では見ることはできませんが、本州北部～九州、朝鮮、中国北部に分布しています。一般に、春植物の中でも一足早く開花し、花を終えると茎と葉が伸び、周りの樹木の葉や大型の草本が茂る 5 月下旬頃には実を結んで活動を終えます。

アイヌの人々はチライアパッポ、つまり「イトウの花」とよび、この花が咲き始めるとイトウが遡上してくるため、漁の支度に取りかかる目安としていたそうです。残念なことに、このイトウも絶滅の危機に瀕しています。

フクジュソウをはじめ、身近な植物の 4 種に 1 種が現在絶滅の危機に瀕しています。本園では、これらの植物の危機的状況と保護の取り組みについて紹介する「絶滅危惧植物展」を 5 月 30 日から 6 月 18 日まで開催します。

この機会に植物との関わりについて考えてみませんか。



## 8. レブンアツモリソウ

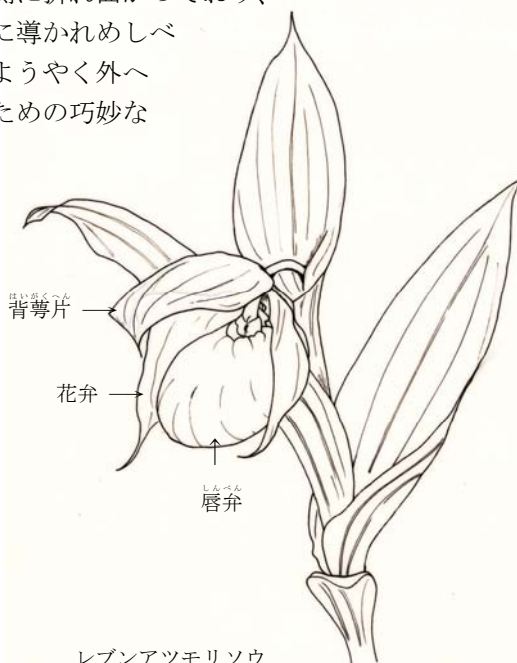
北海道北部に位置し、花の浮島と称される礼文島の代表的な花の一つにレブンアツモリソウ(礼文敦盛草 *Cypripedium macranthum* var. *rebunense*) があります。レブンアツモリソウはラン科アツモリソウ属の多年草で礼文島だけに自生しています。以前は島のあちらこちらで他の草花と共に咲いていたそうですが、現在では群生地以外にはほとんど見るができなくなりました。レブンアツモリソウはその花の美しさと希少さから山草としてもはやされ、盗掘による過剰採取によって個体数および生育地が急激に減少し、絶滅の危機に瀕しています。そのため保護政策として、1983年に島北部の鉄府地区にある現在の群生地に、立ち入り防止柵が設けられました。また1994年にはレブンアツモリソウが「種の保存法」の特定国内希少野生動植物種に、その群生地は天然記念物に指定されています。

北海道、本州中部以北で見られるアツモリソウ (*C. macranthum* var. *speciosum*) に比べて草丈が低く 15~20 cm、6月初旬に咲く花は径 5~6 cm と大きく、半開性で白~淡黄色です。背萼片は広卵形で先は尖り、長さ約 4 cm、前方へ湾曲しています。花弁は卵状皮針形、長さ約 4 cm、平開せず唇弁を抱えるように斜め下方へ伸びます。唇弁は長さ約 4.5 cm、前方へ突き出しています。

レブンアツモリソウの花粉を運ぶ昆虫はマルハナバチの仲間です。袋状をした唇弁の上部の開口部から中にはいると忍者返しのように唇弁の縁が内側に折れ曲がっており、直接出ることはできません。仕方なくハチは奥の通路に導かれめしべの下を通過した後、背中におしべの花粉をつけながらようやく外へ出ることができます。ハチを利用した他家受粉をするための巧妙な仕掛けです。また、種子は非常に小さく発芽のために必要な栄養を持っていないので、ある種の糸状菌(カビ)と共生することで栄養的な助けを得て発芽することがわかっています。

本園では2000年から本学農学研究科と協力してレブンアツモリソウの人工増殖と栽培試験を行っています。この研究を通して少しでも絶滅の危機から救えればと願うばかりです。

これらの取り組みについての詳細は、5月30日から6月18日まで行われている「絶滅危惧植物展」でご覧いただけます。



レブンアツモリソウ  
(*Cypripedium macranthum* var. *rebunense*)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

## 9. エゾウスユキソウ

「エーデルワイス」の曲で有名なヨーロッパアルプスのシンボル、エーデルワイス (*Leontopodium alpinum*) は、キク科ウスユキソウ属 (*Leontopodium*) の仲間です。現存個体数が少ないため地元では絶滅危惧植物として保護されているそうです。ウスユキソウ属はユーラシア大陸の高山に分布しており、分布域の西端にヨーロッパのエーデルワイス1種、東端に北海道で見られるエゾウスユキソウ (蝦夷薄雪草 *L. discolor*) を含む6種があり、うち4種が絶滅危惧植物に指定されています。ウスユキソウ (薄雪草) の名は全体を包んでいる白い綿毛を薄雪に見たててつけられました。この綿毛は高山帯特有の強い日差しや乾燥といった厳しい環境から身を守る役割を果たしています。

エゾウスユキソウは高山帯の岩場や乾いた草地に生える多年草で、北海道や樺太に分布しています。株全体が白い綿毛に覆われ、茎はそう生し、花茎は高さ13~33cm、花をつけない茎は短く先端にロゼット状に根出葉をつけます。根出葉は倒皮針形で長さ3.5~8cm。花茎の葉は3~4.5cmで基部が細くなり茎を抱きません。7~8月に咲く花は5~22個からなる頭花が密生してつき、頭花を囲むようにフエルト状の包葉が星形に射出して径2.5~6cmほどの大きさになり、花びらのように見えます。筒状の細い花が集まった頭花は径6mm、ときに花柄がつきます。秋に熟す瘦果は楕円形で長さ1mm、冠毛は長さ3mmほどです。礼文島のものはレブンウスユキソウといい、地域によって形態が多少異なることから産地名がついています。エゾウスユキソウは園芸用の採集などにより生育数が減少していることから、環境省によって絶滅危惧植物に指定されています。

園内の高山植物園ではエゾウスユキソウのほか2種類のウスユキソウ属を見ることができます。オオヒラウスユキソウ (大平薄雪草 *L. hayachinense* var. *miyabeanum*) は、北海道の大平山だけに見られますが現存個体数が非常に少なく絶滅の危機に瀕しています。もう一種のチシマウスユキソウ (千島薄雪草 *L. kurilense*) は南千島の海岸に生育しています。本園では種の系統保存を目的にこれらの管理、育成を行っています。



エゾウスユキソウ (*Leontopodium discolor*)

## 10. クロミサンザシ

北海道内の湿地や河畔沿いの林で見られるクロミサンザシ（黒実山査子 *Crataegus chlorosarca*）は、かわいらしい白い花をつけるバラ科サンザシ属の落葉小高木で、高さ約6mほどになります。サンザシ属（*Crataegus*）は北半球の温帯に約200種があり、そのうち100種あまりが北アメリカに生育しています。日本ではクロミサンザシのほかエゾサンザシ（*C. jozana*）、オオバサンザシ（*C. maximowiczii*）の2種が自生しています。

クロミサンザシは北海道、樺太、中国東北部に分布しています。サンザシ属特有の刺が少なく、若枝、葉、花序に白い軟毛が付きませんが後に無毛となるのが特徴です。若枝は紫褐色、葉は広卵形で長さ5~10cm、幅3.5~9cm、羽状に浅く裂け不揃いな鋸歯があります。托葉は半円形で鋸歯があります。花序は散房状で、5~6月に咲く白い花は径10~15mm、花弁は5枚からなり、雄しべは長さ6~7mmで花から長く出ます。花柱は5個で雄しべより短く、柱頭はややふくらみます。果実は6~9mmの球形で、熟すと黒紫色になります。エゾサンザシは枝と花序に軟毛が密に生えることでクロミサンザシと区別でき、北海道、本州（長野県菅平）、樺太で見ることができます。オオバサンザシは北海道（根室地方）、樺太、シベリアに生育しています。クロミサンザシは近年の湿地開発や河川改修などによって生育に適した環境が失われ、個体数が減少していることから環境省の絶滅危惧植物に指定されています。

アイヌの人々はクロミサンザシやエゾサンザシなどを「火の神の好きな木」という意味でアペ・ニ（火の木）と呼んでいました。そして、赤い発疹が出たりしたときにこの木を黒焼きにして水に溶かして塗り、また横腹の痛むときには木を削り煎じて飲んだそうです。サンザシ属の仲間は世界中でその果実や葉が民間薬として利用されており、特にヨーロッパや中国では古くから血圧を安定させたり、消化を助けたりするのに処方されています。

甘酸っぱい果実はビタミンCやミネラル成分が豊富ですが、渋みが強い種類もあるため生食には注意が必要です。

クロミサンザシは本園内の灌木園で見ることができます。そのほか、北アメリカ原産で鋭い刺を持つアーノルドサンザシ（*C. arnoldiana*）が本園外周のフェンス沿いに植えられており、美しい赤い実が目を引きまします。



花

クロミサンザシ (*Crataegus chlorosarca*)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg>

参考：日本の野生植物（平凡社1989）ほか

## 11. キキョウ

秋の七草の一つで、夏の盛りから涼しげで楚々とした青紫色の花をつけ、秋の訪れを告げるのはキキョウ (*Platycodon grandiflorum*) です。古名をアサガオといい、山上憶良に詠まれた歌が万葉集にあるほか、戦国時代には家紋として明智光秀や加藤清正らが用いています。さらに江戸時代においては美術工芸品の文様として扱われるほど古くから日本人の生活に深く根ざし、文化を育んできました。また根は薬用として、漢方では桔梗根ききょうこんと呼ばれ、咳や痰をとり、気管支炎に効くとされています。平安時代に中国からアサガオ (朝顔 *Pharbitis nil*) が渡来したことから、薬の名として使われていた中国名の桔梗きちこうがもととなりキキョウという名になりました。

キキョウはキキョウ科キキョウ属 (*Platycodon*) の太い根茎を持つ草丈 50~100 cm にもなる多年草です。葉は互い違いにつき狭卵形で長さ 4~7 cm、幅 1.2~5 cm で縁には鋭い鋸歯があり、葉の表面は無毛で、裏面に白緑色の短毛があります。7 月頃から咲く花は茎の上部に数個つき、つぼみは紙風船のように膨らみます。青紫色の花は鐘形で先が 5 裂に分かれて上向きに開き、径 4~5 cm で、ときに白色や淡紫色の花を付けることもあります。果実は倒卵形で中に多数の細かな種子が入っています。日本では北海道~九州、奄美諸島までの日当たりのよい山野の草地で見ることができるほか、朝鮮、中国、ウスリーにも分布しています。観賞用として庭園などに植えられたり、栽培されたりして園芸品種も数多く作られています。しかしその一方で自生地ではその多くが採集や草地の開発などにより生育場所を追われ現存個体数が減少しているため、環境省の絶滅危惧植物に指定されています。秋の七草のうちフジバカマ (藤袴 *Eupatorium fortunei*) も同様に絶滅の危機に瀕していることから、秋の五草にならないようこれらを保護するとともに伝統文化を継承していきたいものです。

キキョウは本園内の高山植物園で見ることができます。そのほか草本分科園にはキキョウ科の仲間のツリガネニンジン (*Adenophora triphylla* var. *japonica*) やサワギキョウ (*Lobelia sessilifolia*) などがあり青紫色の花が秋の風景を彩ります。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg>



キキョウ (*Platycodon grandiflorum*)

参考：植物の世界 (朝日新聞社 1997) ほか

## 12. キンロバイ

キンロバイ（金露梅*Potentilla fruticosa* var. *rigida*）は高山帯の岩場で見られる高さ30～100cmになるバラ科キジムシロ属（*Potentilla*）の落葉小低木で、多数の枝を広げて岩場にしがみつくように生え、梅のような形の黄色い花をつけます。樹皮は赤褐色で古くなると紫褐色になり薄くはがれ落ちます。葉は5枚の小葉からなり、小葉は長楕円形で長さ5～15mmと小さく、両面に絹毛があり、葉柄の付け根には托葉があります。7～8月に咲く花は鮮黄色で枝の先に1～3個つきます。花は径2～3cmで花弁は5枚、雄しべ、雌しべともに多数つき、花柄には毛が密生します。瘦果は長さ1.5mmほどの卵形で長い毛がまばらにつきます。北海道、本州中北部で見ることができのほか、樺太、千島、朝鮮、中国、ヒマラヤ、北アメリカなど北半球の北部と高山帯の広い範囲に点々と隔離分布しています。そのため花色や葉の形、毛の多少などの形態的な変化に富み、地域ごとに多くの変種や品種が報告されています。例えば本州の南アルプスや四国では、白花のハクロバイ（白露梅*P. fruticosa* var. *leucantha*）を見ることができます。また、北アメリカのロッキー山脈では標高3,500m以上に、さらにヒマラヤでは標高5,000mを超える高地にも生育するほか、蛇紋岩や石灰岩のようなアルカリ性の岩盤からなる土壌にも見られるたくましい植物です。このように各地の高山の岩場や特殊な土壌条件など、厳しい環境下にあえて生育することで、キンロバイは他の植物との生存競争を避けて生き残ってきました。

キジムシロ属は世界に500種近くありますがキンロバイだけが茎が木質化し低木となり、そのほかはすべて多年草です。キンロバイは花が美しいことから観賞用として盆栽に用いられ、強健である特性を生かして庭園や公園の植え込みに用いられ、その一方で近年、自生地では園芸用の採集や高山の生育環境の変化などにより現存個体数が減少しつつあり、限られたわずかな環境でしか生育することができないキンロバイにとって深刻な問題となっています。そのため環境省の絶滅危惧植物に指定されています。

本園内の高山植物園には、岩組を覆い隠すほどに大きな株のキンロバイがあり、6月下旬から晩秋まで黄色のかわいらしい花を楽しむことができます。



キンロバイ

(*Potentilla fruticosa* var. *rigida*)

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

<http://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg>

参考：日本の野生植物（平凡社1981）ほか